

私の学生時代

歯学部
歯学科

教授 志茂 剛



このたび、「私の学生時代」の執筆のお話をいただき、懐かしい日々を思い返すことができました。ありがとうございます。私の大学生活の最初の6年間はクラブ活動とアルバイトに日々明け暮れ、その後の大学院4年間は臨床と研究漬けの毎日でありました。

川と温泉のある小さな田舎町に育ち、小学校から憧れていた先輩が歯学部に進んだことをきっかけに歯科の道を選びました。大学生活は広島市内に6畳1間の間借りでスタートし、每晚近くの銭湯に通っていました。銭湯では背中に立派な桜吹雪や龍などさまざまなアートを施した方々と洗い場を共有することも当時はございました。大学の講義は原子爆弾で持ちこたえた黒ずんだレンガ造りの

建物でも行われ、さまざまな学部の学生と入り混じって聴講していました。校内には過激派・中核派の拠点施設が堂々とあり、ヘルメットとサングラス、マスクで覆った武装集団に授業が乗っ取られ、延々と演説をきかされることも度々でした。当時、若かった我々は彼らを講義室から追い払うため、ドイツ語の講義に侵入してきた武装集団のお尻に蹴りをいれたのです！あとは想像におまかせします。昼間はクラブで練習を行い、夜はアルバイトで展示会場設営、警備会社、測量などのさまざまな職種の方々にお世話になりました。臨床実習で最初の問診が上顎癌の患者様で、口腔外科を専攻するきっかけとなりました。卒業後は岡山大学第二口腔外科(松村智弘教授)で外来と病棟で臨床を行う傍ら、



軟式テニスのオールデンタル団体戦で3連覇を達成したときの表彰式。(手前が私)

夜と休日は口腔生化学教室の滝川正春教授に癌の血管新生の研究のご指導をいただきました。毎週月曜日の朝の進捗報告会に急かされ、日曜日に重い足で研究室のドアをひらくと、必ず滝川先生は深夜まで仕事をしていたらよかったことが懐かしく思い出されます。

北海道医療大学は、臨床も研究も垣根がなく人を育てるうえで素晴らしい環境であると思っています。今後も人と人の繋がりを大切にしながら臨床、教育、研究に携わって参りたいと思います。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は志茂教授と長谷川講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

リハビリテーション科学部
理学療法学科

講師 長谷川 純子



中学時代、脳腫瘍のために半身まひとなった伯父の影響で、リハビリテーション職に興味を持ちました。伯父は理学療法中の疼痛に苦しみ、何か色々やったところで日常生活に変わりがあるわけでもなく、イマイチな印象を持った理学療法士という職業。それでも理学療法士の仕事を調べてみると良さそうな仕事にも思え、まずは自分

でやってみたいと思って札幌医科大学の理学療法学科に入学しました。

大学生とはもっと時間に余裕のある日々だと思っていましたが、実際はタイトな講義日程と大量のレポートに追われる日々。同期の協力なしには試験もレポートも突破できなかったと思います。時間割が窮屈すぎる、課題がありすぎるといつも文句を言っていました。勉強にはそこそこ真面目に取り組んでいたと、一応そういうことにさせてもらうことにします。

プライベートでは旅行や音楽にハマりました。ちょっと話がそれますが、私は小学生の時にいじめられ、以来すっかり委縮してしまっただけで大学生になっても他人の顔を窺う癖が抜けませんでした。メンタルのリハビリテーション途上でもいまいしょうか…、そんな中で「他人を気にせずにやりたいことをやってみる」という目標をたて実行したのが旅行や音楽だったわけです。



同期との温泉旅行で。左から2人目が私。

音楽は興味があったドラムから始まってアコースティックギターに手を出し、大学の友達と「ゆず」のコピーをするなどして楽しみました。旅行は相部屋式のユースホテルで色々な人と出会う旅が好きでした。大学時代にユースで知り合った友達の中にはいまだに付き合いが続いている人もいます。いろいろな背景を持つ人と交流すると自分の既成概念が壊され、新しい風が吹いて一回り成長できるような気がしたものです。この経験が、後に日本を飛び出して海外に行ってみようという気持ちに繋がり、青年海外協力隊員としてブルキナファソやマラウイに行く基礎となったのかもしれない。アラフォーでもアラフィフになっても、やりたいことをやってみる精神で日々過ごしていきたいと思います。



大学3年生の実習で出会った患者さんと。白衣を着ているのが私。